

TOP INTERVIEW

特集：富士山とともに

〔富士急行と富士山麓観光〕



「富士を世界に拓く」 創業の精神のままに

富士山麓電気鉄道の創立から数えて88年。
富士山麓一帯の観光開発という使命のもとに発足した富士急行は、
地域の公共交通の担い手としての責務を果たしながら、
「足を持った総合観光企業」として発展を重ねてきた。
現在では、山麓一帯に遊園地やゴルフ場、ホテル、別荘地など、
さまざまなジャンルのリゾート施設を展開し、
富士山麓エリアの観光客誘致を牽引している。
2013年6月、世界文化遺産に登録された富士山。
「富士を世界に拓く」、創業の精神のままに、
エリア全体の価値向上と環境保護に取り組む、
富士急行株式会社の堀内光一郎取締役社長に
お話を伺った。

文●茶木 環／撮影●織本知之

富士急行株式会社
取締役社長

堀内光一郎

Koichiro HORIUCHI

自然の活用と環境の保全

——富士山麓で幅広い事業を展開する御社は、富士山麓の観光開発を目的に創業したと伺っています。

堀内 今でこそ富士山と富士五湖は、世界的観光地として脚光を浴びています。富士急行が創業した大正末期と言えば、富士山は未だ遠くから仰ぎ見る霊峰であり、富士五湖や山麓の景勝を知る人は稀でした。麓に到達するにも大変な時代だったわけです。そうした時代に、富士急行初代社長の堀内良平は、「富士を世界に拓く」の精神を持って、1926年に富士山麓電気鉄道を創業しました。鉄道を敷設して足を確保し、道路・水道などのライフラインを整備して別荘地を開き、ホテルをつくり、ゴルフ場を整備した——観光客誘致に取り組んだのです。富士急行はその創業の精神のままに、一人でも多くの方々に素晴らしい富士山の眺望を楽しんでいただけるように、さまざまな施設を整備してきました。

昨年6月、「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録され、海外からのお客さまも大変増えてきました。これまで培ってきたことが実を結び、さらに成長・発展する時期を迎えていると思います。日本にとどまらず、世界中の方々に富士山を楽しんでいただくように努力を重ねることがわれわれの使命であり、それがわれわれにとって「富士を世界に拓く」ことになると考えています。

——富士山の環境そのものを守る取り組みもされています。

堀内 これまでわれわれが手掛けてきた開発は、常に「自然の活用」と「環境の保全」が基本にあります。一般的には、自然環境と開発は対極にあると思いがちで、富士急行の開発も「木を切り倒し、自然を破壊した」とお考えになっていらっしゃる方も多いかもしれません。しかし、現在の富士急ハイランドは1961年、真っ黒な溶岩地帯に開園しましたし、1935年に開業した富士ゴルフコースも辺り一帯野原で、木々はまばらでした。われわれが土を盛り、数千本・数万本単位の木や芝を植え、数十年の時間をかけて育てた結果、現在の姿があるのです。林や森をつくりながら開発してきたというのが当社の歴史です。少しおこがましい言い方かもしれませんが、「保全」よりもさらに積極的に、環境を「創出」していると言えるかもしれません。

——そうした自然を守り、育てる思いは、社員の皆さんにはどのようにして伝えていらっしゃるのでしょうか。

堀内 もともと環境への意識が高い人材が集まっていますし、入社時から、環境と安全については厳しく指導しています。1992年からは、新入社員研修の一つに「富士登山及び美化活動」を組み込んでおり、新入社員は必ず清掃登山を経験します。富士山に登らずして、富士急行や「富士を世界に拓く」精神を語ることはできないですから。清掃登山は1976年、創立50周年から「全員登山」を周年記念事業として行っており、

昨年は富士山世界文化遺産登録祝賀として、馬返しから五合目までの清掃登山を実施しました。

今の若い人たちは、幼少時から学校や社会の中で環境教育を受けて育っていますから、環境に対する知識や意識のレベルが高いと感じます。そうした若い社員に、会社の方針を明確に示すことで、「富士山を守りたい」という思いや「環境を大事にする」意識は、自ずと培われていくと思っています。

——環境保護の取り組みの一環として、交通事業では早期に低公害バスを導入されています。

堀内 先代社長の頃にも、環境にやさしい富士登山バスを開発しようと、自動車メーカーに低公害バスの開発を依頼したのですが、当時の技術水準では実現することができませんでした。私が社長に就任してから低公害バスについていろいろ調べ、一番効果が高いCNG（圧縮天然ガス）バスの導入を決めました。1995年に、富士スバルラインと富士山スカイラインに、国立公園としては初めてCNGバスを導入しています。CNGバスは、一般的なバスと比較すると、ランニングコストやメンテナンス費用がかなりかさみますが、環境保全のためにはやむを得ません。以来、低公害バスの導入を進め、現在、富士急グループでは36台のCNGバスと32台のハイブリッドバスを運行しています。

富士山麓を拓く観光鉄道として

——「富士山に一番近い鉄道」である富士急行では、観光電車も積極的に導入されています。

堀内 富士急行のそもそもの成り立ちが、「地域住民の足」としての役割を果たしながらも、一番の目的は「富士山麓に世界からお客さまをお招きするための幹線をつくる」ことにありましたから、観光面に重点を置くのは必然だと考えています。

国内外のお客さまに、富士山までどのように快適に過ごしながら来ていただくのか、どのように楽しみながらお帰りのか、



観光電車「富士登山電車」。開業当時と同じ「さび朱色」の外観が伝統を感じさせる



「富士急ハイランド」は開園から53年を数える（写真提供：富士急行株式会社）

シャトーマス」の屋外型テーマパーク「トーマスランド」があります。トーマスが大好きな子どもたちのために運行しているのが「トーマスランド号」です。「トーマスランド」を開設して、富士山麓に多くのお客さまにお越しいただく。「トーマスランド号」に乗って、トーマスの世界をもっと楽しんでいただく。すべては「富士山麓にお客さまをお招きする」ということに結び付いています。

——富士山麓を訪ねる道すがらが楽しいということですね。

堀内 富士急行は、1991年にスイスのブリュグ・フィスプ・ツェルマット鉄道、現在のマッターホルン・ゴッタルド鉄道と姉妹鉄道提携を結んでいます。このレーティッシュ鉄道が、スイスを代表するツェルマットとサンモリッツ、二つの山岳リゾートを結ぶ「世界で一番遅い特急列車」とも言われる「氷河特急」を運行しているのですが、これが実に素晴らしい。

ツェルマット鉄道は1890年の開業で、120年以上前から環境保全と観光を両立させながら安全運行を継続しています。その理念や経営方針は、われわれにとっても大変参考になる。さらに言えば、ツェルマットの町は大气汚染を防ぐため、全域で一般のガソリン車の乗り入れが禁止され、鉄道と電気自動車、馬

車が移動手段です。富士山も、環境保全のためには、先進国スイスを見習うべきところがあるのではないかと思っっています。

——富士山の五合目まで鉄道で行けるようになる可能性もあるのでしょうか。

堀内 ユネスコの諮問機関である「国際記念物遺跡会議」（イコモス）は「マイカーなどによる登山における排気ガスの問題」を明確に指摘しており、それを考慮すると、鉄道が有効な施策であることは間違いありません。鉄道を敷設し、五合目までの交通手段を鉄道にすることは、「環境の保全と活用」「環境と観光の共存」を考えれば、私自身は必然的な方向性だと思います。ただ、皆さんそれぞれの立場で富士山に対する思いがありますので、皆が同じ方向を目指せるかという課題はあります。

バスも良い交通手段であるとは思いますが、鉄道は地域の観光資源にもなり、喜びや、ある種の郷愁など、私たちにさまざまな思いを与えてくれる稀有な存在です。鉄道でなければ生み出せない価値というものは、明らかに存在すると私は考えています。

現在、富士山の入山者は夏季に集中していますが、鉄道であれば通年での入山が可能となり、入り込みが平準化するメリットがあります。イコモスでも登山者数、おそらく入山者も含めてだと思っておりますが、そのコントロールについて言及しており、定員がある鉄道ならダイヤの組み方で入山者数のコントロールも可能になるでしょう。

世界文化遺産登録後の課題

——環境保全もそうですが、富士山の世界遺産登録に向けて長年尽力されてきました。

堀内 1992年に、富士山の世界自然遺産登録の機運が盛り上がったときからですから、20年来の取り組みになりますね。当社も国や県からのご支援をいただきながら、海外からのお客さまにご不便なく使っていただけるように多言語表示を導入するなど、さまざまな施策を行いました。2011年に、富士吉田駅を「富士山駅」に改名したのも、「富士山再認識」の取り組みの一環です。大月駅で連絡しているJR東日本にとっては、当社の改名により駅名表示やプログラムの変更など、膨大な作業とコストが生じます。国際的な観光戦略や地域振興について、深いお考えを持つJR東日本の理解と協力があってこそ実現できました。

——世界文化遺産登録後、新たに取組まれていることはありますか。

堀内 これまでも環境面での取り組みを行ってきましたが、さらに先鋭化して実践しています。例えば、イコモスが五合目の景観や施設デザインの改善を指摘していますので、われわれが運営する五合目のレストハウス「雲上閣」の外壁を含めた全面改装を、山梨県と連携をとりながら、今夏に向けて進めています。この取り組みはおそらく五合目の施設改善のモデルケースになると思います。

これまで国立公園内の観光施設の新築や改修を行う場合は、特別地域に対応し

ただのか——富士急行が考える一つの方向性として投入したのが、工業デザイナーの水戸岡鋭治さんデザインによる「富士登山電車」であり、「トーマスランド号」などの車両です。

「富士登山電車」は、車窓から眺める富士山と電車の旅そのものを楽しむくつろぎをテーマにしていますが、木や布など素材の良さを活かす水戸岡さんのデザインが、われわれの予期しないところで、環境や自然との親和性も高めてくれました。

また、富士急ハイランドには「きかん

特集：富士山とともに

【富士急行と富士山麓観光】

た色調にするなど、環境省の指導のもとに行われてきましたが、「信仰の対象と芸術の源泉」として登録された富士山に対するイコモスの指摘は観点が異なりま

す。単に環境阻害として施設の色調やデザインについて論じているわけではなく、イコモスが求めているものももっと深く、五合目という場所が巡礼の道でもある登山道の一部として、富士山信仰に合致したものでなければならぬという

要因が加わったように感じます。富士山とともに歩んできた当社としても、歴史、文化・芸術、美しい自然景観、この世界に誇る富士山を守っていか



富士急行と姉妹鉄道のマッターホルン・ゴッタルド鉄道のPRポスター。写真右は「世界遺産」通勤車ヘッドマークを付けた通勤車両6000系とマッターホルン号。



なければならぬという大きな責任を感じており、世界文化遺産にふさわしい地域づくりの一端を担うべく、施設などへの設備投資をはじめ、さらに環境的な要素に重きを置いて、当社ならではのアメニティを提供していきたいと考えていま

す。われわれの基本的な仕事は、富士山の周囲に、さまざまなサービス施設をハーブド、ソフト両面で散りばめていくことです。例えば、温泉に入って見る富士山の姿は、ただその場で立って見る富士山とは異なる味わいがあり、それが付加価値となる。富士山をより美しく見せ、特別な思い出をつくる、その場でしか味わえないサービスを私は「触媒」と呼んでいますが、これからはますます大切になってくると思います。

「富士山を中心とする広域的な観光振興についてはいかがでしょうか。」
堀内 私が会長を務める「富士五湖観光連盟」は設立80年を迎え、日本では広域観光の先駆けとなる団体です。初代社長の堀内良平が富士山麓の五つの湖を「富士五湖」と命名して、観光客誘致に取り組みで以来、富士五湖が一体となり、観光地としての魅力を高め、地域活性化を図る目的で活動を続けてきました。しかし、残念ながら静岡県側には広域の連盟がなかったのです。そこで山梨側と静岡県側が一体となって活動を展開しようとして、2001年、両県のサポートを得て、富士五湖観光連盟と「静岡県富士山交流推進協議会」で「日本富士山協会」を設

イメージが強いのではないかと思います。五合目に存在する施設は信仰に関連するものという位置付けなのでしょうね。その深意を受け、世界文化遺産という視点で景観をつくっていかねばなりませんし、われわれの対応も変わっています。

「富士山麓を訪れる観光客について、何か変化はお感じになりますか。」
堀内 それは大きいと思います。富士山の構成資産の一つ、北口本宮富士浅間神社は705年の創建で、富士山に登拝する吉田口登山道の入り口です。ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの二ツ星に指定されて、近年は参拝者より観光客が多くなりましたが、改めてその歴史や文化的価値が認識されるようになりました。物見遊山だけの観光に、信仰という深みのある

立しました。2007年に中国山東省泰安市との間で「富士山・泰山友好山提携」、今年2月には中華民国山岳協会との間で「富士山・玉山友好山提携」を結ぶなどの活動を行っています。さらに、昨年暮れには富士五湖観光連盟主催で「世界遺産富士山の環境と観光のあり方検討会」を発足しました。この検討会では、富士山の環境管理と経済活動のバランスをどう取るべきか、民間主導で議論し、来年春以降に提言書をまとめ、関係機関に提出する予定です。

「富士山を中心とする広域的な観光振興についてはいかがでしょうか。」
堀内 私が会長を務める「富士五湖観光連盟」は設立80年を迎え、日本では広域観光の先駆けとなる団体です。初代社長の堀内良平が富士山麓の五つの湖を「富士五湖」と命名して、観光客誘致に取り組みで以来、富士五湖が一体となり、観光地としての魅力を高め、地域活性化を

「富士山を中心とする広域的な観光振興についてはいかがでしょうか。」
堀内 私が会長を務める「富士五湖観光連盟」は設立80年を迎え、日本では広域観光の先駆けとなる団体です。初代社長の堀内良平が富士山麓の五つの湖を「富士五湖」と命名して、観光客誘致に取り組みで以来、富士五湖が一体となり、観光地としての魅力を高め、地域活性化を

「富士山を中心とする広域的な観光振興についてはいかがでしょうか。」
堀内 私が会長を務める「富士五湖観光連盟」は設立80年を迎え、日本では広域観光の先駆けとなる団体です。初代社長の堀内良平が富士山麓の五つの湖を「富士五湖」と命名して、観光客誘致に取り組みで以来、富士五湖が一体となり、観光地としての魅力を高め、地域活性化を